

花柳事情

醉翁道士家著

田圃

上

76
434
1

3



花柳事情

崇禎紅顏書

津門
號 38
卷 1



澤
名
不

所
出
也

山
披
貝
上
投
火
之
乞

著者之横着可見則不肯投火之乞
換序以撥隱事使苦云

澤 玉嶺拜識

坪内雄藏氏寄贈

明治二十六年十一月五日

形字之... 可... 日... 仲... 許... 許... 許... 許...
 十... 十... 十... 十... 十... 十... 十... 十...
 十... 十... 十... 十... 十... 十... 十... 十...

名花 綉句 新 月 得
 天 煉 光 質
 秋 花 柳 子 修

的 曰 曰

六神

朝訪歌樓暮酒壚
 蓀衣花敗月好
 旋嬉田家若做
 潘家例未嘗呼
 為妓董狐

自注曰樹書影云潘景升好名顯
 諸姬自為撰誌文諱艷麗時人
 謂景升是破之董狐

超古奇獨

元印東清卷之二

四三

不蓄金兮不養力亦是天下一情郎
十有年未旧誇知花街柳巷皆吾鄉
轉覆藝妓三寸舌嬌哭娼妓七寸腸人
若欲知吾情味未試澤東浚瀨傍

擬南洲大羅丸之詩體

花街柳巷揔押領使子謙情史



雲晴心裡無晴時
鬱鬱多兒欄怨盈
虧多似今宵
無主月能
為我出
頰天



思之會馬為子



是貪是富一任天笑見窮鬼襲門前吾黨心
 事人若問在向風流着先鞭
 家無一物不知貪筆硯獲錢則買春風流天
 地吾々亦自是榮華榮曜身

王谷道師魔將軍

王谷道師

魔將軍

出家多對何了自白
 畫屋成在空烟烟
 好无系無處小
 直打都存虎
 孤烟如
 烟海難定

兩個印章

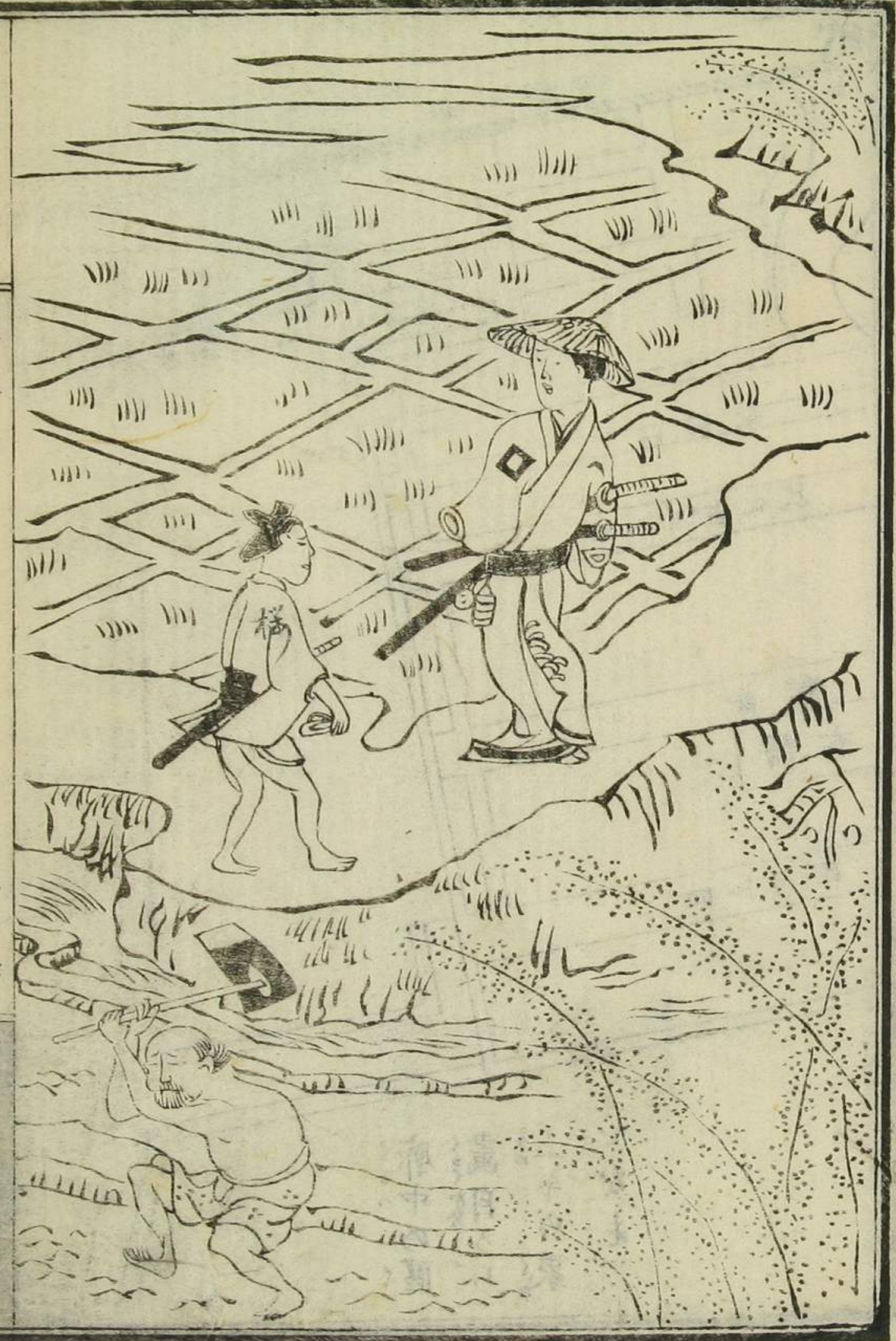
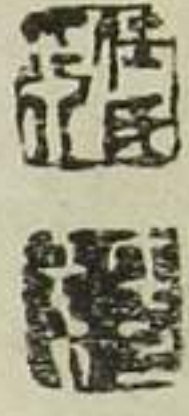
七印更清卷之二

五

花柳夢情 卷之十一

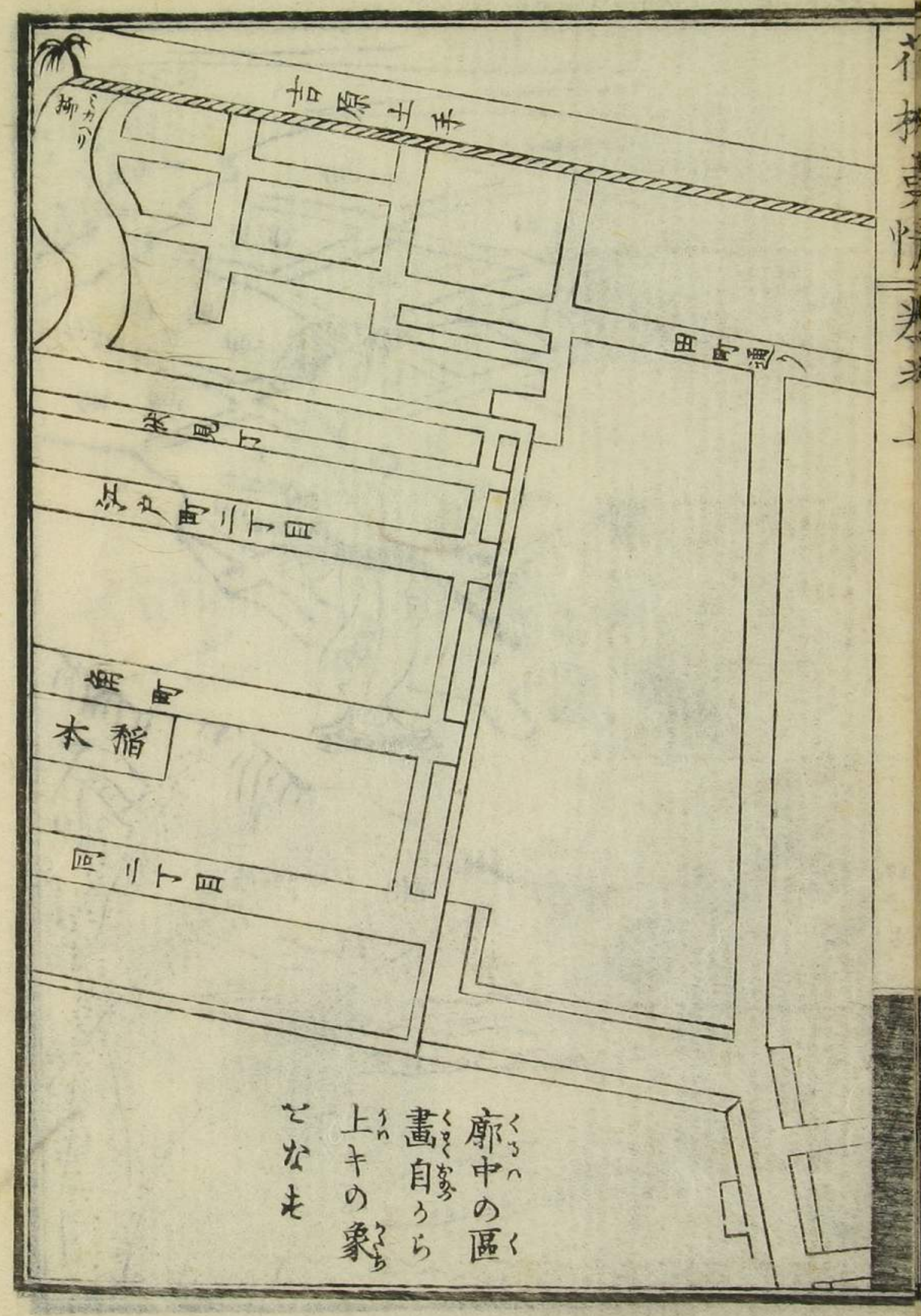
近宝六子暮川中修通

醉多道士瑞四

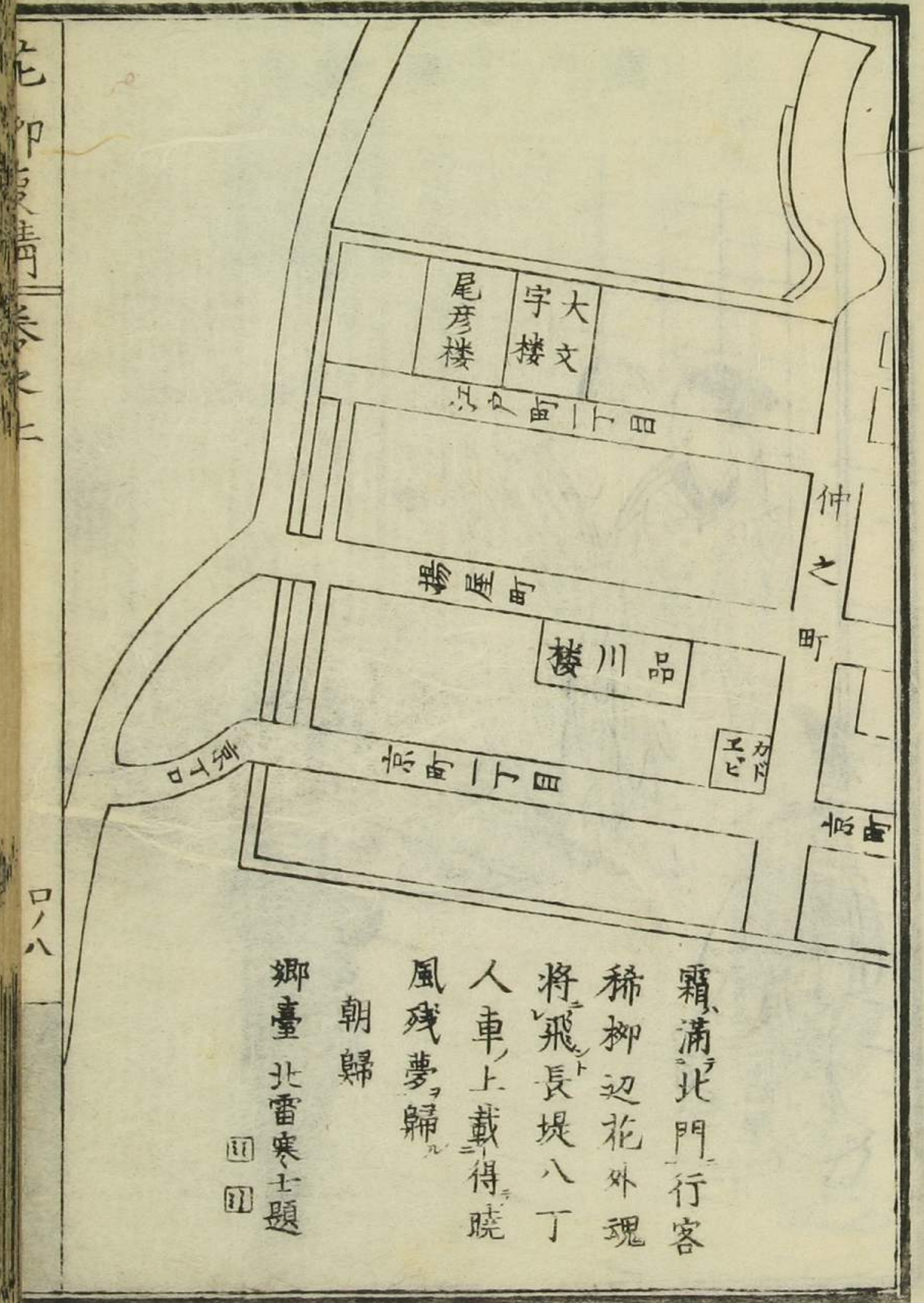


花柳夢情 卷之十一

口ノ七



廊中の區
畫自うら
上キの象
となま



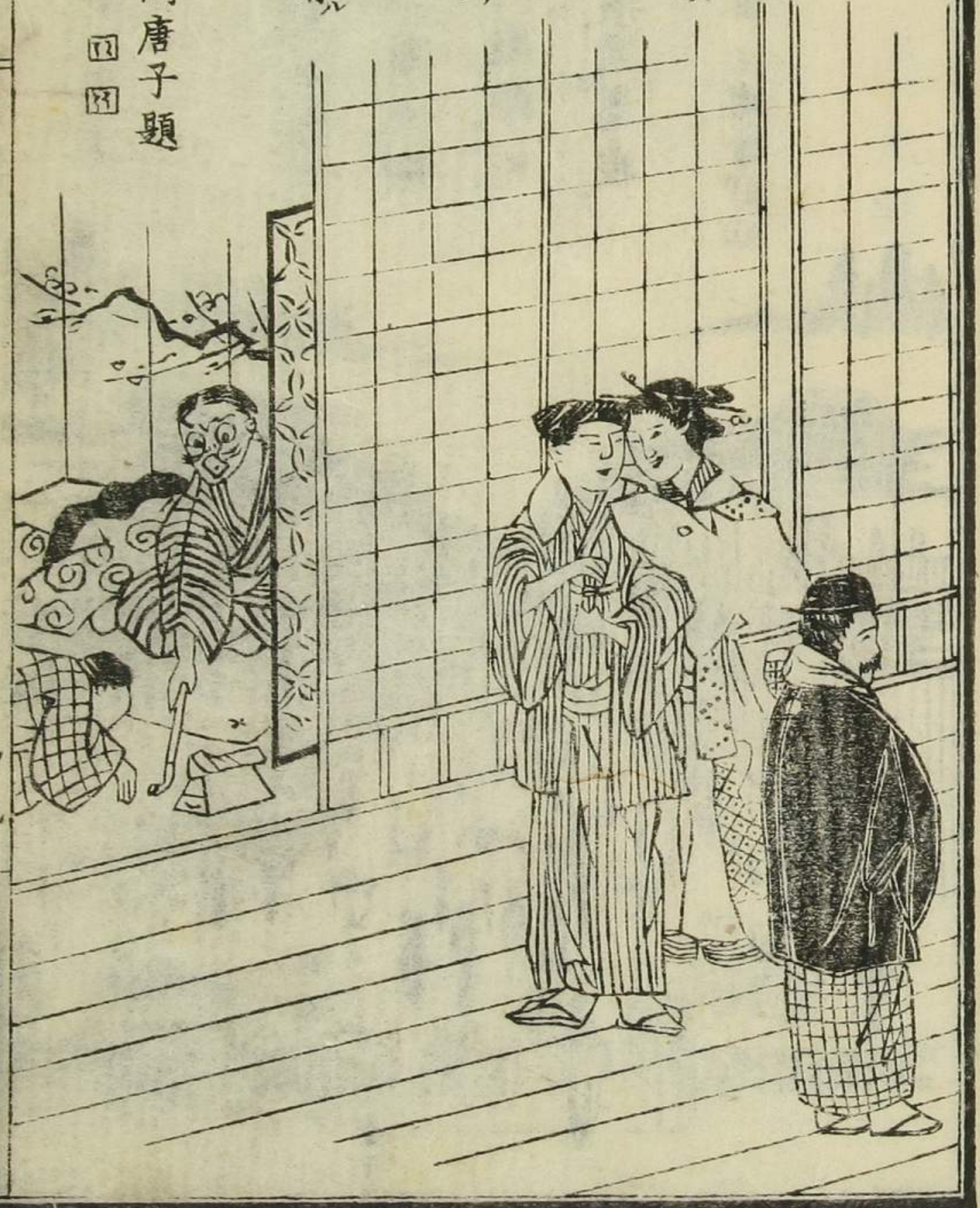
霜滿北門行客
稀柳辺花外魂
將飛長堤八丁
人車上載得曉
風殘夢歸
朝歸
郷臺北雷寒士題

上七 卯 青樓 下 止

銀燭晃々
不夜城樓
上楼下三
絃声章臺
別有奇妙
事東室雨
起南室晴

章臺
崎陽馬唐子題

四 四



口ノ九

青樓廊下の圖

青樓廊下



根津遊廓の夜景

朝送郎歸暮待門
想思欲寄幾回翻
莫嫌紙上難難判
是為流痕漫墨痕

駿陽島田 三鑑齋田



○凡例

一 此書の道士が七八年間巨多の光陰と財産と
を浪費乱用し彼の狂句に所謂吉原が明く
なまば家の暗の謂小く此が為め何も彼も皆
茶ア浮雲小歸し赤貧乏となり果たる時身体
と俱小残りく花柳の事情乃ち無形の所有
物と一切合切列べ立くくなまば憶測及び傳
聞等の説の毫末も記載せむ
一 根津の元來吉原より分離して獨立せし者な

まば本書小記入を他の四宿品川 新宿 千住 板橋の方今
 縦へ章臺の雲間小簷へ花貌月眉西施其人の
 如きあるも悲しひ哉宿場女郎飯盛の遺種な
 きば余の花柳の文字と把り冠を事と欲せ
 を因る之と除く但し事情小至てハ毫も異な
 る事なり請ふ四宿小遊ぶ客人堪忍とヨ
 一 篋棒な堅造ありと此書何の益り之有んと拔
 きハ拔をとり著者の寓意と解はる見なき
 目盲のみ目盲何ぞか錢と出して本を買んや

余ハ唯ぞ愛をべき少年子弟の為めに此身と
 財産とと犠牲小し花柳の残忍酷薄なるを知
 らしめん中々心切な量簡小く著述せり
 一 此書と讀む余が敬愛を人ヨ唯事情小通事
 て意氣あらんと欲を勿き進む花柳社會の
 馬鹿々々しく耐らぬ良心と呼び起し素足
 ぎも下駄でも靴でも草鞋でも花柳の地小容
 ぎらん事と期せ
 一 地方の責小任を人物此書と反覆して其意

と得ば又以て施治の一助とらん豈獨り道樂
 元介者流の玩物のみならず唐の御伯叔さん
 曰く名教之中自在樂郷と余の馬鹿者の云之
 不反して曰く此書之中自在訓誡皆さん其ま
 之と思へ
 一書中の言語の各府縣合并なり蓋し看官の區
 域と廣ふまゝ九式の一件小由りくらくハ物
 せり野暮と咎めなさんな

廓の治郎さん識

花柳事情總目録

- 上之卷
- 延宝年間吉原通ひの圖 ○新吉原の圖
- 青樓廊下の圖 ○根津遊廓の夜景
- 緒言 ○青樓の組立
- 引手茶屋の組立 ○青樓の格式 但小中並小見世娼妓の景像
- 娼妓となる手續き ○梅毒病院の事 附検査の事
- 中之卷
- 揚代金の分配 一頁 ○臺の物利益分配 三

- 小物の事 五
- 裏の事
- 娼妓の客と振る所由 74
- 娼妓と弄る方法 28
- 居續の事
- 幫間の事
- 娼妓小金と與ふる機會
- 若い者の事
- 初買の事 6
- 馴染の事
- 厚待所由
- 遊ぶ方法
- 掛版藝者の事
- 惣花の夏 並小之て投むる機會
- 揀權の事
- 下之巻

- 娼妓の心ろ
- 遊ぶ可らざる日
- 鼻毛と讀る事
- 青楼と驚るも惡謔
- 花柳事情の總まくり
- 二階の鴉母の事
- 客の容姿の事
- 吝ん坊を遊び様
- 身受の事

花柳事情目録 終

眼尾俯地

鼻準朝天

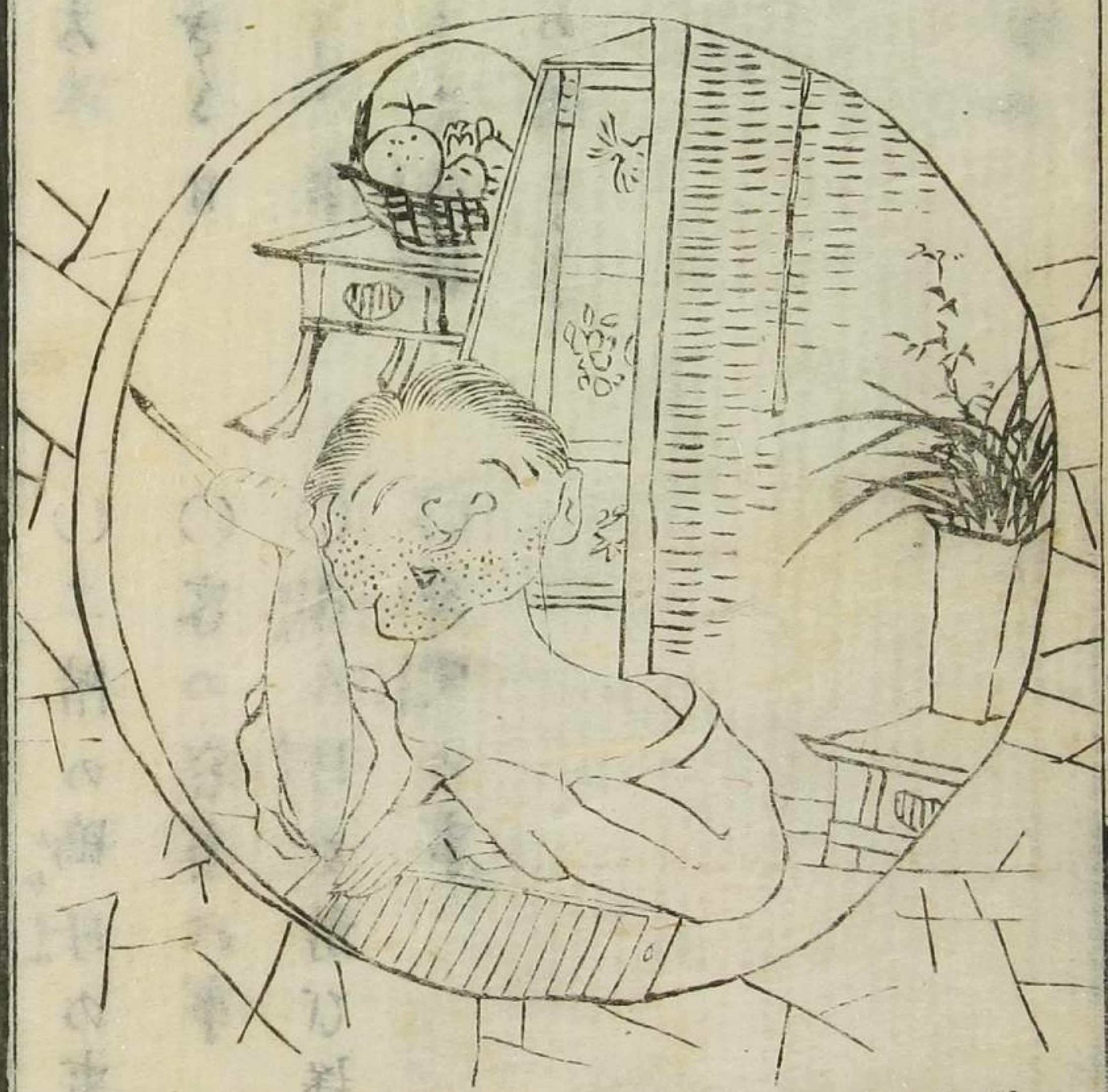
固非凡俗

色界神仙

像贊

招州隱史

招 媿



醉多道士 無則 異見 惚社 舞之 果苦 混著 花柳 事情 欲回 復情 金圖

花柳事情卷之上

花柳御門 醉多道士戲著

煩悩即ち菩提菩提即ち煩惱
 猶國土草木一切として成佛せしめんとき
 慾あり況て人間社會の歡樂を覺へ限りなき慾
 快と試みたる凡夫有情の吾人をや身既に穢土
 火宅に沈倫めり理と知せども各々其火宅中に
 歡樂を貪ほらんと欲し心嘗て三界の安かた

きと味へども皆其無安中に愜快と需めん欲
 蓋一木佛金佛糊篋法師より之と見えバ噫く
 浅ま一の哉其歡樂其愜快皆是と種々の魔障う
 とあり一切苦厄の地獄と変ト身と責ると言ん
 めれど然もも退て兜卒天と通り抜け有項天
 不入り意の太上の情と忘るれ肯と以て得て
 悉く之と阿羅漢と俗小布袋和尚の布袋の内は投
 せば色は是空空は是色瞿曇氏釈伽色よりして
 空に帰一大千世界と濟度する大法螺は人虚誕と法

螺と吹と云ム接ると發明一志賀寺の上人の空
 に経云吹大法螺と云明一志賀寺の上人の空
 よりして色は帰一二條の御息所と意の慕ひ終
 に一首の国風と得て還空に帰も情の天地色の
 世れ中那処堅造も姿の天桃の春と傷み容の垂
 柳の風と含み綽約と紅顔の冬差たると見こ
 是れ臭骸に春へ装ふ人に過むと東坡居士の九
 相詩の序と引用一啞して顧り見ざるの野暮
 的と露呈せんや何邊の金吉も揚州の解語花の
 酔て欄にまね倚りて風と買ふ様趣此櫻花に雨

の過るが如きを見て是も妖狐なり人間に齒ひ
まぐりらばと一弾して指を振ふの不粹的を現
出せんや然り而も只ご佳人と好み愛ま
るゝと知らば一徑地に陥つゝ溺るゝ者い未ご真
の歡樂愉快を知らざる東邊僕のみ安穩漢此み
其経歴したる花柳の費へ徒らに汚騰珍の名
を求めたる價小過ぎ大破家三太郎の綽名を得
一免許料に異ならむ斯の如き野暮に寄て集つ
て箱根山へ引摺あげ化物社會小編入し再び人

間に復籍するを許さばしそ可なり去来や酔和
尚ハ彼の雙々岡不徒然てオツウ社會と茶々無
茶に一管に戲毫も隠遁しつゝ兼好法師に其
身擬し玉の盃そこはろとなぐ花柳社會の内
外表裏五層樓の天辺より長家町う並比椽の下
まご遠慮會釈も南無阿弥陀佛唯ご南無妙に穿
くり立て歡樂愉快の真趣を述べ以て諸游子に
教化せんとも冀く我世尊釈伽牟尼佛鶴林混
槃の耳に歌だて酔和尚が大千世界の色衆生に

七卯長青卷之三

濟度まゝ方便と聽聞し此功德の由る八功德水の金池を經り彼岸に達し瑠璃壯嚴の章臺に登せ伽陵頻伽と不夜城を歡樂なきしめ賜はん更と歸命

○青樓の組織

青樓の由る來りや遠し矣今是を其歴史の譲り茲も速べは抑も花明柳暗の章臺を以て淫虐見ると厭ふの処とならう其是を淫虐見ると厭ふの処と為す已が淫虐の奉行ありと以て此の

見解と下りのみ章臺豈か一概に淫虐場と論じ去らんや放屁儒者腐廢宗旨家の之と馬頭鹿尾の毛多物小乗驅て二三十年の昔に追ひ遣り凡そ世間の人生計の違ま勞苦の餘贅を散消せん為小酔と沾ふは多く夜陰を以て時と為す而して割烹店に登り微酔と取り妓と聊し他が今晩有しより御座附の定例文句を俄鳴らす再もや願ふ御負具に終り是非御近ひ内はとの捨言葉の歸りさ迄數瓶の酒を倒さけりて得と倒せ

花柳新集卷之二

四

八則ち沈酒如泥となすハ豫ク期ます所今宵歡
 々弄々々の主義なり而して沈酒如泥となすや
 其儘其処ハ横卧しく華胥樂郷ハ夢遊せんとも
 了ハ酒家の常にしく是李白が長安の大道酒樓
 ハ醉倒き鮓公となり損ドくる所由なり然まど
 九割烹店ハ黄梁客舎に非ぞ一泊と許さるるハ
 固よりハ縦へ圖武八と変名し鼻の孔より煙
 灯と繰り出は状様に至るも夜半と報し帰途と
 促さるるもハ不愉快なごら帰らざるも得ぞ帰

了や人力車の便ありと雖ども酔て世故と忘る
 たる時に及んぐ我家に帰るの面白うらざるハ
 牡丹餅社會ハいざ知らは酒家に於てハ概むね
 然り或ハ其割烹店や嘗て相識と以て遇ま一泊
 々許さるも三更咽濁と告るに及んず水と需めん
 とさるも意の如くならは煙草の火と得んとは
 了も心不任せは殊ハ曉天ハ達しる帰へるの不
 体裁なるハ昨宵の愉快としく此一朝ハ失なり
 しも其甚だしきに至りてハ相償のいざる事往

かあり 是れ豈真愉快と沾ふ者の為を処ならん
や歌妓の事情に別あり 眠る 鯨猫 青樓に即ち然らむ 晚
と報る 梵鐘一搗仲の所は櫻を散し 誰か暗燈燈
と點ト中見世のわいらんて 籬の内へ突出
さし 暮る 黄昏より 雞かけの曙と啼ふ 後朝ま
樓の奴婢 鴉母梳櫛い 恰りも 皇帝の陛下に待坐
ま ぐ 如く 畏む 敬まひ 唯命維奉ト 百千一
く 昔く 事なく 夜三更に 品海の 鮮魚と得べ
く 居たつとも 佛國の美酒と飲べく 山海の 珍味田

野の佳果時と擇まは 膝前小山堆して 遺る物な
し 其酔て 眠るや 錦繡の蒲團 三重宛然山とを
其身と して ボツクリ 埋め 吐き 吐き 侍女
唾壺を奉り 煙管の声 あれば 火の 御坐ひまは
りと 香炭を 捧げ 厠に至らんと せれば 梳櫛之
が 先導し 銀盃小水と 盛り 手と 洗ふに 供ふ 而
して 醉美容 側小あり 巫山小 登り 雨雲と 試みん
と せむ 則ち 随只クツキ 眠らんと せば 則ち 儘
樓上樓下と 横行も 咎めず 者なく 放哥 高吟を

此即長清卷之七

七

事に於てかや実小自家に在るもら得難き待遇
の青樓小非どし其と安々や在る焉人若し試
みに之と割烹店待合船宿小行かひみよ非常の
金錢と賞と雖ども此十分三の氣儘愉快と得
べりらざるなり況てや煎餅然るる蒲團の上へ
投り出され構ひ付ざる不幸に遭ふ時かや此青
樓と割烹店とへ其組織異小はるの致は所月幣
の差ある豈怪しむ小足ん由此觀之の青樓ハ尊

舟の別なく職分の上下なく太政大臣も大工の
八五郎も一視同等人として皇帝陛下の位置と
假有せしむる喜見城娑婆の極楽情土として日
に月子繁昌と来り大廈高樓年々空と凌いで雲
漢小質へ蹄輪の声の晝夜小絶へざる所以なり
○引手茶屋の組織
一枚一本の容の以ざ知らば少く体面と修飾
とる人小して四五田の囊中ある人ハ青樓小登
るに必らば茶屋より毛蓋し其便利少くあら

茶屋の組織

七

されば也其至了れ景况愚佛先生嘗て狂詩小令
 日何地風一向御久振於霜是次二階御連申と云
 しが如く客の茶屋小臨むや細君も家婢も若い
 者も猫も洋犬も摺子木も竹箒も一同小飛出し
 オヤア、且那よく被入しやまると真個小か
 珍らしの事定めり他へ面白い世界か出来たん
 てせよオホくと梅やか二階ハ宜りひ掃除の済
 なりカアか二階へと手をと取り足と取り引さる
 例一輩九へ喰ひ付是ハ虚ニ揚さハ坐蒲團己に

上段の処小位置々占煙草盆其左りに侍と家婢
 ハ茶具々持来り若ひ者ハ湯沸々提り来り頭々
 下げ手々つく支鶴鴉の尾より烈し細君曰く今
 夜ハ何処へ客引さ角海老小一様う尾彦も仕
 様も細何んでおねへ如此に諸方浮氣と一々日
 外だもかいらんの所りち言傳があまおまこと
 ヲ瓢漆の処へか出なさいよ客引んならんよと
 仕様鼻下長おのおか梅でもか竹でも揚州楼へ往
 てか坐しきと見て来なると客の買瓢漆のか以

らんの坐敷巳小塞り一や否と見せにまる也誰
しも同價て以り名代部屋注後小寝んうりた
以らんの坐敷と寝ん事と望むうり故小客の顔さ
へ見まば右の如く問ふ是こ一般の事情なり梅
下度よりふかぎのましと最一足で塞らる所
でしと細引うりへアノ且那直とかいでなきい
ままろく一口飲りままろと斯く云い早くかみら
んの面相と拜まんとまる者及び時限の恐もお
る者ハ一腹吹ふの違なく直ちに樓へ登るゆめ

有ればなり客令ツりら往たつと仕様らありら
一盃やらうと是こ於て酒肴と命と妓と驛と樓と
小至る期限と許る是を黒人の游び様小一々情に
通しうるの処置ありなり細且那もう十時で
まよそんなに愚弄りまはしと早く往て顔と見せ
こかあげかきヨ客愚弄りはなら鞠と以て猫
吉と愚弄まが狐の愚弄うるニヤア荒の油揚か
入らら面倒ど猫アレ又あんな憎き口とかき
たまつてかみらん小言告ままヨねへ細君きん

細真個でもよ最う被入でせぬ客△く細竹や招
牌で燈な招牌と云ふ梅や寐衣の宜うひシテ且
那か大切な物うこぎい外ならか預り申しませ
ふと斯く言ふ主義小ニツあり一々全た々楼小
於て紛失物あるハ茶屋の係り合ふて且那へ申
一訳なき故之ハ保護するれ良心小出で一ハ此
客金あるり否やと試み了の横着心小出づ客△
うさナ夫トヤア此包みと預つて置て呉んなと
下へ下せば又前の如く細君も家婢も若い者も

猫も拘子も臺所道具違と飛出して左様ならか徐く
そとか早様お帰なきんゆつくり早く帰如斯
楼に至り尚不飲と直ち寐ると問ハ最
後に客が寐所小横卧一かいらんの同衾をるに
非をば茶屋の決一々去らば己小れ以らん来々
同衾をるば慇懃小梳攏小向ひ何ぶん宜一ふの
一語と遺して去り客が不時の需めありて楼奴
の呼び小来り事あるに非ざれば拂曉の迎ふ来
りの外も顔出せば抑も茶屋がかいらんが

たか加妻清卷之上

十

同衾とて見届けて而る後ち去るの意味ある也
茶屋の其主義客の歡樂と周旋とに有る若
し萬一か心らんが一見の上めて客と振り鴛衾
に臨まざれば梳櫛小就て是と質問し見立替後
よあそとるとり又られ心らんと説く同衾せし
むる等の所置と付ざるを得る若らざれは客小
對しと周旋の義務と缺バ也一小時始めての客
ふして横着と構へ彼我と振り宵の三日月一般
に只其顔と見せしめるのみ故に揚代と拂ふ能は

是と陀々としてお廻る者なきふしも非きバ因く
同衾と見届け全くと歡樂周旋の義務果て去る
なり注意も亦と深しと謂べし
以上と以て見よバ茶屋の体面と鴛衾と外に
別に益なきが如くかれとも大に然らざる者お
るなり請ふ以下に陳述とて看一看とよ凡そ
茶屋の青楼より稍や權と有てるが故小種々の
益と生と来ると何と以て權と有てるとをれば前
ふも言が如く客の歡樂と周旋と茶屋をわら

花柳遊書卷之七

七

青楼の所に置に氣に喰事あをバ客と氣動一思
説と構へ他の樓小轉セしむる策と為し得べし
是より由る青樓の其意と失なそん事と恐る己と
得を其下に立ち其為は所より任しぬ先客のフリ
茶屋より往りて相對てふて登樓まじや樓の一
登接も余計小貪おらん事と之を勤め臺の肴の臺
錢も余計小貪おらん事と之を勤め臺の肴の臺
まじ臺より菓子臺と客の沈酒小付け込ん種
々雑多持出をなせども茶屋よりの客をまじ酒
肴とも茶屋の自由小在りて客の好む物々然

らざれハ客相應の物小非色バ漫りに取寄る事
なく之を非常の金錢を貪おらざる益の一なり
客非常の野暮の上顔色海綿も三舎と避け且
つ氣障と自惚小く一身と為はが如き者フリ小
く登樓をまじ振る事目前なきとも茶屋より
往ら其かひらん茶屋小對し決し床の番人
と命と疝癘玉と唾壺へ扣き込み徒ら小焼まじ
子木と股間小立しむるの患ひなく之益の二也
客本来無一物小登るも茶屋よりまじ樓と

辞まゝ不際一々更不体裁と留めば之益の
三也妓と聘し纏頭と唄へんと是も囊中なき
時茶屋小命もきべ紙花空紙なりと投卜客の体
面と保護も之益の四なり客フリホく些少れ
不足金と生まれば其か以らんの前も憚らむ
嚴酷く之と責り甚ど一きに至りてハ罵詈惡口
と極め憤怒か耐へざらしめ彼の杉戸屋の七人
切と現出せしむるに至るも茶屋より是れが一
銭も置らざとも難有か徐小れ帰りの一語と共

不送り出し茶屋へ帰る後其勘定不足ありハ
知人なきバ心よく貸典し然らざるも平穩小其
不足と請取場所不至りて決一々責るとなり之
と益の五なり其他フリと異なる趣きあるハ枚
舉不違まあらば斯る組織と営業の目的となま
が故に仲れ町の茶屋ハ巍然と大厦と起し甚だ
しき缺乏と訴ふる者なく皆中流以上の来客々
辱のうしか茶と濁して烏兎と送り

○青樓の格式

青樓の格式（きやうりゆうのきせき）の當時（たうじ）の嚴重（かんとん）小一格（せういちかく）の外（がわ）小出（せうしゅつ）所置（しよぢ）あまは閉店（へいテン）せしむるに至（いた）りたまとも今（いま）の其事（このこと）なく同等（どうとう）の位置（いち）を以（もつ）て営業（えいぎやう）せり然（しか）もとも家に大厦（たうかく）高樓（かうりゆう）あり平家（へいけ）二階（にかい）家あり衣袋（いふく）小錦繡（せうきんじゆう）と纏（まと）ふあり二子（ふたご）編（あ）と引（ひ）けり在（あ）り蒲團（ふとん）小三重（せうさんじゆう）あり煎餅（せんべい）然（しか）もあり況（きやう）てや揚代（やうだい）小八十七（やちじゅうしち）丈（ぢゆう）五厘（ごりん）の五十（ごじゆう）丈（ぢゆう）の四十（しじゆう）丈（ぢゆう）の廿五（じちご）丈（ぢゆう）の二十（にじゆう）丈（ぢゆう）の差（さ）あるに於（お）てハ公税（こうぜい）小上（じやう）中（ちゆう）井下（へいげ）の別（わか）なきも辨（わ）小由（ゆ）て差（さ）を立（た）ぎらる得（え）らるなり其差（そのさ）左（ひだり）の如（ごと）し

○大見世

大見世（おほみよ）と稱（な）る者（もの）ハ往昔（むかし）ハ之（これ）と大籬（おほきさき）と呼（よ）へ其娼妓（おやぢぎ）小紫（おむらさき）の字（な）れ号（ごう）と專用（せんよう）する得（え）細見（こまみ）記（き）ハ此印（このいん）と用の十五（じゆうご）六年前（むむろくねん）不在（ふざい）りてハ獨（ひとり）り玉屋（たまや）山三郎（やまさんらう）のみなり一（ひと）ヶ同家（どうけ）廢業（はいぎやう）の後（のち）ハ復（また）と絶（た）へく大籬（おほきさき）大見世（おほみよ）と見（み）ば降（くだ）りてハの解放（かいほう）の分（ぶん）あそしりり以後（いご）旧来（きうらい）の格式（きせき）も共（とも）に湮滅（えんめつ）し今（いま）ハ揚（やう）代（だい）と客（きやく）及（およ）び茶屋（ちやゑ）の私許（しりきよ）を以（もつ）て大見世（おほみよ）と為（な）る者（もの）左（ひだり）の如（ごと）し

○稻本楼 角町十八番地 杉浦庄三郎

○角海老 一赤鬚楼と目 京町一丁目 砂村をみ

○尾彦楼 江戸町一丁目 中村彦太郎

○大文字楼 江戸町一丁目 波木井清次郎

○品川楼 揚屋町十九番地 板木莊吉

以上五楼と大見世と云ふ該楼のかいらんハ一夜の揚代金八十七錢五厘昼夜金一圓七十五錢此内獨り角海老楼の濃紫ハ一見識と立く設ハ一夜一昼と雖ども昼夜の揚代小非ハ其聘小

應せば大見世のかいらんハ吾部屋の外ハ臺所様の部屋及び其身の化粧部屋と三室と所有一器材家具調度全備せざるなく其坐敷ハ琴碁書画の具塵と拂つて排列し醉余の玩弄ハ供家婢の侍とる者ニ三人より少なりらむ然も前借と償のみ早く川竹の流と脱せんと計るかいらんハ貧乏然としく其部屋の寂寞と見まども十中七八ハ皆な人目と街に波々々々為り醉多道士其人の如き穴と穿つに致

マをる者小あらざれば内幕の貧乏の辨別し能
ひざる也

中見世

中見世の本と半離交り店と唱へ細見記小▲●
此印と用の當時不在り十四軒の多数あり吉
原のみ旦つ現在の中見世と唱ふる者より品位
と結構ハ稍や上等小く昔をら猶布新造附小く
夜仕舞ひ金二分と賣とり今の中見世ハ畢竟を
る処ろ招牌の這入茶屋より客を受ると云家屋

及びかいらんの部屋並びに衣袋蒲團等の美と
以く客の許をまて小く識別をるのみ之と奉ま
ひ左の如し

- 大八幡楼 根津須賀町七番地 岡田ぎん
- 住吉楼 江戸町二丁目八番地 三井屯み
- 梶田楼 同丁 七番地 梶田六三郎
- 龍ヶ崎 同丁 十二番地 河並寅吉
- 大松葉楼 根津八重垣町五十二番地 渡辺清吉
- 本金村楼 同丁十二番地 北村藤助

○龜屋

同 同丁十八番地

松本金藏

○三木屋

同 同丁三十一番地

倉橋五郎兵衛

○鯉木楼

京町二丁目

関口直次郎

○蓬莱屋

揚屋町二十五番地

田中銀藏

○伊勢楼

同町

大野利八

○東屋

根津八重垣町辛八覽

吉田直次郎

○常盤屋

同 同丁六十二番地

金子きん

○八幡楼

江戸町三丁目廿番地

此十四楼ハ揚代小五十銭あり四十銭なるお

り或ハ三十七銭五厘の店も有り且ツ衣袋調
度の美と否とありと雖ども招牌の這入店な
ると以テ花柳社會小枝私許を有者但一家
屋の結構ハ大八幡楼を以テ第一等となし衣
袋調度の美麗ハ住吉楼を以テ第一等となし

○中米楼

京町二丁目廿六番地

矢島富次郎

○河内楼

同町 十五番地

安藤昇五郎

○山田楼

揚屋町十一番地

志方平次郎

○新稻本楼

同町 廿五番地

田中銀藏

此四樓ハ並びに招牌の這入らざる店ホして揚代も金廿五錢ハ過ば河内樓ハ三十七錢五厘然もども衣類調度の美麗と且つ一朝茶屋の客を受る日ホ至まば純然たる中見世なまば道士ハ特に中見世とて許ま

以上十八樓のおいらんハ皆な部屋持ホして各々婢女と仕役し仮令下駄箱紙屑籠の代用と為れと雖ども桐の簞子一二荷と所持し調度も亦と醜くりらむ其他坐敷の景容ハ大見世のおい

らんハ優る者あり或ハ並見世のおいらんハ劣る者ありと雖ども其美と街ホ者多数なるを以て中見世と為をなり

○並見世

並見世ハ中たり難く下り難く之と當時の惣半籬ハ店ホ比ホ可ん哉と雖ども金瓶大黒伊勢六等の惣半籬の店ホ有に比ホ惣半籬ハ比ホ可らむ然らば之と下ホ編入せんとまれば甚ど酷ホ過る故ホ道士ハ並見世の稱と設け目

撃上げきじやう小こ於おて之これを挙あげば左ひだりの如ごとし

○安尾張 京町二丁目三十六番地 石原定吉

○松大黒 同町 三十三番地 石野平次郎

○稻辨楼 同町一丁目十六番地 小林栄助

○福岡楼 同町一丁目十八番地 宮沢とつ

○鶴吉楼 江戸町二丁目三十一番地 石川金次郎

○金泉楼 同町 三十番地 伊藤清兵卫

○杉戸屋 同町 二十四番地 齊藤茂十郎

○福大黒 角町 九番地 武本ふく

以上八楼の娼妓ハ狭隘と雖ども各々部屋持小

〜且婢女と仕役者あり揚代金ハ僅らに

金廿五匁をきども希色小坐敷の結構ハ中見世

のかいらんと〜叔面せしむるに至る者あり

蓋一客の運よき者斯の如き中とが僅々の散

財まで大楼小游蕩するの思て得べし然ととも

豫く之と禎知して遊ぶ者ハ道士の如き花柳々

家とまゝ者小あはざれハ豫知し難く誠小か氣

の毒と言ハざるを得づ

○下見世

下見世の當時不在りてハ少き等級なきハ
 も有らざりしガ方今小至てハ長家局見世或ハ
 是と也と并せし一般に之を稱し中ハ甚ど下
 見世ハ人ましく酷なる者あきど其部屋なく蒲團
 の煎餅然るの同格なきハ亦た止て得ざる事
 どもなり因て楼名家名と記載せは
 ○娼妓のありさま
 大見世のわいらんハ有繫ハ大楼不起卧衣類

調度部屋等も美小して麗なるガ故ハ彼の所謂
 居ハ形を移すの言葉小背らば進退坐卧とも急
 忙しりらば大様小しく品格あり客小接する
 も喃々贅口と叩くば稀きにり言も一言小
 て直打あり食物及び金銭の話と為さる概
 之之言へハ華族のね嬢さんの意気なる者と
 謂べし然れども方今ハ中年より娼妓となる
 者十中の八九なるガ故ハ宿場女郎の仕替る
 者私窩子より一足飛小揚る者又ハ揚弓店茶屋

女裏店の汚轉婆娘より大見世のおんかいらんとな
る者おまらばら悉々大様と言いない非あまきども毎ま接せ小
必かならば二三人の古ふるくよりかいらんさらる者有あら
故ゆゑ小此者の薰陶くんとう小よりく仮面かめんあらばらも野界やかいな
らむ蓋かきし天性野界てんせいやかいなる者ハ馴染あじしの後のちも假面かめん脱だつ
却かへして化かの皮かわを現あらわれを止とめ誰人たれびとと論ろんぜども見易みやすき
所ところなり
中見世ちゆうけんせいのおんかいらんハ一等いちとうと降くだり初買はつまいの客きやくと雖い
ども贅ぜい口くちと叩たたき振ふると者ものハ此限このかぎり小非ちは或あるハ

梳くし櫛しの勸すすめに依よるば食物しょくぶつの好このみを為なし且かつの客きやく
の前まへ小於おくムシヤ、物ものを食くひ廊下らうげと通過つうぐうせり
際さい他たの部屋へやを窺のぞいて捨すて言葉ことばを遺のこし一いつ体たい起お止と
とも騒さわ々ざしき風かぜあり是こ中見世ちゆうけんせいの宿弊しゆくへい小こして
誰たれも之これと怪あままざればなり
並見世なみけんせいハ又また一等いちとうと降くだり初買はつまい小於おてハ敢あく中見ちゆうけん
世よと異ちがひなるなし雖いども二ふた買かめより我儘わがままとい言い
ひ出いでで自みづから臺たいの物ものと勸すすめ且かつつ店みせの若わかい者もの小
阿諛あごん辞氣じきと帯おびびアノ源げんどん一いつ盃さきハ頂たかごと客きやく

の欲まゝも欲せざるも閑せぬ飲食せしめ或
ハ客の鼻下長たるを知まば若しお前をん十幾
やつてお呉んなさるゝと言ふに至る而して客之
と心よく投ぜば更に其世話となは伯母さん不
此伯母と云ふ者も投ぜん事と求み人として厭
ハ一ちる愚状と呈せ其野界なるハ中流以上の
客不接する事稀なるが故に如斯く致さ哉
下見世の娼妓小至つゝハ最も野界の甚どしき
者と云蓋し衣類調度なく且つ部屋もななく常不

髪部屋小衆妓と起臥し下等客の風評を喃々し
見聞の中流以上不及びざるの致す所と雖ども
初買より客前に於て食飲し時としてハ鼻哥を
誦ひ飲食盡まば強て勧め之を命を倒底並下
の兩店の客の囊中ハ有無に閑せば一錢も多
貪おらんともるに汲々として者なり其白昼髪部
屋不轉臥するや愛想もななく大字形となり偶々
助倍の風来く唐縮緬の紅禪と吹被り丹鼎と暴
露まゝも人も咎めば自らも恥ぢぬ実ハ名状を

可らぎく醜状と為る者往々あり諺小曰く氏より育ちと下見世の娼妓と雖ども其实家小在り一日の斯の如くに非り一朝夕竹の下流に沈倫一爾来見聞小従ふ此醜状と為るに至り世小下見世と幽霊店と唱ふ蓋一半纏着職人の登楼もつと以つたり其野界なる推て知るへ

○娼妓となる手續

其出良家貧家小関らば阿娘の娼妓となる只と四途あるのみ其一ハ良家素海の変小遭て一

朝瓦解一進退維と谷まる時或ハ家族数名小一貧一商業の目的と立ちも資力なき時或ハ父母病卧して医薬の資及び糊口の術盡く時此と是と薄命の娼妓出稼となす其二ハ一家小嫁と其夫不時の災害小由る損害と来一頼むべき親族もなく殆んど危急小陥る時或ハ其夫頼階小一々家産と治めば且他婦小意あるも遂く事あとのむ為めに悪計と構へ災害と故造婦と惣着一々娼妓と為る等此と是と不幸の

娼妓出稼なまとなま其三ハ父母已ニ死亡し兄弟姉妹或ハ他の親族の家ハ厄介あつたるも後來の目的めあなく且つ其親族の心志頼み難くがきりとして他ハ嫁をべき衣帯及び調度の全備ぜんをなく由よ一ケ年娼妓となりて之を備へ而して他ハ嫁をな或ハ狎客中真情ある者あまば一身を委ねんとあ娼妓となる者此を是を猿利口の娼妓出稼と為す其四ハ其性淫蕩いんにして甲乙を擇まむ情と通し屢バ父母ハ困難くわんと蒙らむ之を懲治

監かん不入いの資力なく懲改ちやうの為ため小なる者或ハ本人の希望のぞ小因よくなる者或ハ情夫じやうと私奔し後ち情夫じやう又欺あれなる者此を是を自業自得じの娼妓出稼なまとなま娼妓となる者以上四途の外ハ出いで而して娼妓とならんと欲ほむ者ハ口入くて以て其抱かへんなる楼う小至り目見へて為し其容貌がの美醜び及び嘗て娼妓となりしなりしや否いなとて聞き前借金ぜんと定むま但た一身いの為ためめめたる者ハ而し後ち病院小入いて陰部いんと検査けんし其梅毒びんなき證しやう

得るは本籍の郡區役所小就く娼妓出稼願面小
奥印を請ひ之を東京の警視本署他府縣ハ其管
廳小呈して鑑札を受け始めて前借金ハ證文を
為さるに至る但し前借金ハ一年一證文小七十五
圓より多うる可らざる成規なりしが近年小及
んぐ前借金の金額高頓りに騰貴し百五十圓より
少なりらむ五百圓より多うらざる巨額小進め
り彼の遂令天下父母心不重生男重生女とい其
を今日の謂ひ哉嗚呼十五歳より四十歳までの

婦人ハ其價金銀貨の如く非常の騰貴を來し四
肢五管全備なる壯年の紙幣の如く日小月に下
落し試み小一年三十五六圓の男子を求めの鬼
の嘔吐の如く雲集雨來を誠小ハヤ嘆息の至り
なるとも迂闊策よりなる結果小く是非もな
き次第と謂まゝくの娼妓となり前借金と引換
ふまゝ證文左の如し

差入申前借金證文之事

何府縣下何郡區町村番地
平民誰幾女又ハ附籍

右誰儀拙者幾女或ハ附籍凡介之者ニ候処今般本人儀嫁入之節衣類手道具等調達致シ兼候ニ付娼妓ト相成出稼之上調ヒ度望ニ由リ熟談之上望ニ任ヒ合對ニ以テ貴殿方ハ出稼娼妓小致シ住込セ前書金田借用申候真正也諛金御返濟之儀ハ本人稼ぎ高之内ニ以テ月々御差引被下度仍テ前借用證文差入候仍テ

何 某

一金何田

右誰儀拙者幾女或ハ附籍凡介之者ニ候処今般本人儀嫁入之節衣類手道具等調達致シ兼候ニ付娼妓ト相成出稼之上調ヒ度望ニ由リ熟談之上望ニ任ヒ合對ニ以テ貴殿方ハ出稼娼妓小致シ住込セ前書金田借用申候真正也諛金御返濟之儀ハ本人稼ぎ高之内ニ以テ月々御差引被下度仍テ前借用證文差入候仍テ

如件

月日

父或伯父 何 某
本 何 某

何某殿

右ハ普通の證文ホテ十中八九ハ是ナリ余ハ父母医菜の料小宛ル杯有ども稀ナリ所アリ抑も此證文面ト見て看官ハ何ホ思ハルコト若シ證文面小本人欠落致シ候得ハ尋ね出シ引渡可申コト又ハ前借金差引シテ残金辨償仕ハルコト

如件

三十一

明文ありハ樓主ハ大ハ安心ナリヘキ事トモ政
府の成規ハ於テ樓主ト娼妓トの合對でなくん
バ出稼入トナリ前借主ト成る事ありハざる夏
なきバ一朝情夫ト手ト把テ唯左様ナリトモな
んとも言をむ出語りナシの落人ト出りけら
んハ將誰ハ向ツテ前金ト取戻を哉又ハ狡僧
娼妓ありテ私ミハ大層病身ハナリ迎も勤めガ
出来ませんハら廢業トスルハ僅クハ病氣と言
ハクハ強ガちに迫ラズモバ無理ハ否の字と言

ふと能を以果ハ上草履ト煙草箱鏡臺ぐらハの
身代限りを取テ泣寝入トナらんのと亦憫然な
らそや然もとも解放前僅々三貫丈ハ四貫文ハ
と女を買ひ十年間其身ト束縛ト牛馬の如く仕
役トシテ因果此明世ト遭テ應報せらる樓主の
身ハ取りテハ愚痴八百ト並ベ魂限り困るベハ
まども娼妓の為メハ救生薩陀の出現ハ逢ト
云ベイヤレ々々南無妙法蓮陀佛四方山人有詩
為證

長臺便緩掃風塵亭主山窓泉水濱即今安坐尻

堪痛況復苦海十年人。

已小其棲小住込や未と嘗く娼妓とかりく覺へ

なき者ハ二日乃至三日間ハお部屋張場ハお部屋張場或

内證との側らり又ハ帳場張場ハ者の見の側小坐

一他のかひらんが彼の所謂泣くハ無情の人と

送り笑てハ輕薄の客と迎ふる情態と見せしめ

然る後ち姪女郎年倍小して古託して立幟な

を蓋し立幟の事以前ハ面倒なる格式あり

殊小莫大の費用と要し容易の業小あらざり

うども今ハ然らば唯ぞ姪と呼び妹と言ふ名目

一對し青接の情態並び小客人小應接其他娼妓

一般の風と教ふるに過は然るども近頃ハ教へ

よりりて始め客小應むると知り者ハ雨夜の

星の如く実小稀よして其娼妓となり始り

お前もん塵つていよの捨言葉と喋り往々接主

として此奴なり手有る哩と一驚と吃せし

むる者少かからば此色自家ある間惡風俗小

慣染一識らば知らば淫蕩学ニ從事一痴夢と蓬
草の間小結びさる結果のみ寔ニ歎息耐へざ
る夏どもあり黙々舎馬唐子氏有詩為證

涼床設置、糞壺傍、破扇携来、娘又郎、淫語謹々入
興処、冷風吹、臭防無方。

○梅毒検査病院の事

昔一未だ病院の設けなき時、小當てや世上の少
年子弟、無残小も毛々生と釘抜の為、小其鼻と
悴とと採取と或ハ頼ひへ洞定と開らき甚とし

きに至りてハ結毒みと変性して終身真人間小
齒ひせらきささる不幸と来一以と夭折を了の惨
状ありき余當時以為らく梅毒ハ女郎買て罰を
了。刑具なりと其然り而して明治聖世の余沢文
明開化の飛ツちも遂ハ玄北の門、及ハ今日小
至りてハ復之例の釘抜の禍ハひて見む豈非常
の恩波と言ざると得んや道士病院の事と探索
せんが為嘗て居残りて為り其状左の如し

第三條 抄出

雑抄

○送娼妓之病院序

明治戊寅夏六月廿八日。道士為避債鬼。飛出家門。賞石蟬花於墨水側。堀切村歸途。枉入芳原。醉餘乘氣動。不意無一文。傲登青樓。沈鈍錚之果。遂為居殘。後朝當土曜日。娼妓等將往病院。於是愚弄半分為序。書惡紙以送之。其辭曰。猿之尻雖真赤。不自知之。及笑他尻之赤。牛之臀雖塗糞。不自厭之。及厭他臀之塗糞。蓋臭者身不知之謂也。詢以上自七十五錢之契情。下迄二十錢踏張。皆不厭。朋輩之摘草。及厭

係醫者。手小言八百至。病院有不满之色。就中鐵面。歷鍛治屋之金床者。施諧諛於玄牝。門頭把池塘。春草結鬚。或描眉目。以愚弄醫者。其所為皆過矣。寢倒惟昔々。唐聖人之治國也。德化及禽獸。豺狼垂耳。後世飛揚者。讚之叩之。銘鐵瓶書。鼻涕紙傳。以為自慙鑑焉。今也大賢明政府。施新政。其德化不啻及禽獸而已。鑿々及卿等之玄牝。保護之。猶阿鼻之於子供。二階御伯母。於卿等叮嚀。反覆不避臭。不辭醜。不便有么麼。梅々好如洗。尻於大川一般。清潔可思。是獨

不卿等之幸福亦我輩飄碌玉之幸福也若夫無政
府大御世話及于此何知天下風雅連日加而恐之
餘響及卿等之玉高乎卿等思此察彼則不笑他聲
愧自覺以戀着政府恩波之滅法難有轉手古舞而
喜賴醫者受檢查焉余之敵媚執煙管捻煙草燃之
一吹與余曰唯於是暫惜別獨入暗燈部屋為不景
氣的面是為序
二三年前娼妓の検査で忌嫌ひし此文小て
知る可し然るに慣るの久しき今の腐廢と饅頭

でも投り出さか如く銭のない巾着でも見せる
が如く面蔽ひも用ひを平氣のか平さんふて絶
く赧面の状ある事か一俣検査日ハ茅原ハあり
土曜日なり一ダ今ハ月曜日根津が火曜日他の
四宿千住板橋ハ之ハ順トて他の日々用中今物
倍連の爲めに検査場の器械を示は左の如し

トヒヤ更青 三十一

方々換るもの
の糸子ひき



病院の創めり設けられ一頃の医員も甚ど不慣
 の事をまば真正直小器械を用ひ娼妓も亦愧
 て面蔽となたり一が今ハ主客とも小慣ま医
 員ハ器械を用ひ唯指頭を以て繰りに玄牝の
 の門と開き其梅毒の有無と檢し若くは廢の瘡
 と雖ども有ときい決して歸さば直ちに本郷の
 大学医学部の病室小送り治療せしむ其費ハ常
 二娼妓の玉と楊代と玉一本小付一本とハ大中並
 総て金二十五錢と定む七厘ツ及除く税の
 楊代分配の処小詳し

うちよて総費小宛つ故小幾月間居るも治療費
ハ勿論飲食費と雖ども一錢も要せば今試みに
芳原と根津との其税高ハ日ハ幾干ツ集まる
りと馬鹿げと算當と為せば左の如く但しか茶
と挽く挽りぎりと又大小店と論ぜむ一妓一昼
夜三本と以て平均ハ

芳原 娼妓の數七百八十人一名より七厘ツ
三ツ即ち 二弔一厘總計金十七圓七十五弔八厘

根津 娼妓の數五百六十人同金十圓四七十六弔

宜なる哉日ハ斯の如く巨額の税金を拂ふが故
ハ數名の梅毒の病娼妓と病室小養な人も差支
へざると獨り奈何せん娼妓の病院小入や其曾
て青楼小在り一日小比むと恰りも囹圄に投
ぜらむとさるが如く氣儘の鬼語と吐あつてハ帝
そも是のこなるむ其欲むる物あるも金かけま
バ徒らに涎まを流して全癒の日を算ふるのみ
此時小當てよく情を娛しむ通人の遙りに金幣
と寄く其不聊を慰さめ全癒出るの後ち他と一

て其眞実まこと小泣なみ一ひとめ眞個まこと小前まへをんのななぜぜをん
 むに淳良じゆんりやうい心こころと持もてぬぬみみささるるんででせせううと喰付くひ
 きい否いな泣なつつううれれるる面白味おもしろみと演えんささししめめんんババああるる
 可べううららむむと雖いへども世間よこ之これと為なるる人ひとの情なさけと娛たのしみの
 一ひとむ備そなに非あらむ空あかしく色いろ小溺せきるる、點えんよりよりと
 鼻び下した長なが小由よてと有あるる一ひと且かつ他たとて泣なむ
 一ひとまま一ひとむむも到底たいてい入い佛事ぶつじ小属ぞく一ひと眞まこと愉快ゆきやくと買かむ
 の為ためと所ところと比ひままバ実まこと小鯁えん鱗りんも音ねなららざる也

花柳事情卷之上 終

